

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

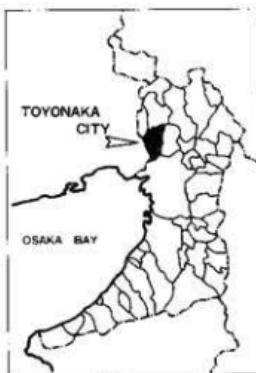
1990年度

1991年3月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1990年度



1991年3月

豊中市教育委員会

序 文

豊中市は、大阪平野の北西部に位置し、猪名川の流れと縁深い千里丘陵によって育まれた沃野に広がり、古来より人々の生活の営みが続けられてきました。一方近年では、商都大阪のベッドタウンとして、あるいは一大交通網の要衝として開発が進み、近代的都市として大きく変貌を遂げてまいりました。

この報告書は、平成2年度事業として国ならびに大阪府の補助を受け、豊中市教育委員会が発掘調査を実施した、本町遺跡と大石塚古墳に関するものであります。本町遺跡は弥生時代から古墳時代を中心とした、市内でも有数の集落遺跡として知られ、また大石塚古墳は国史跡にも指定されている、桜塚古墳群内にある1基であります。以下に報告するように、今回の調査でもさまざまな知見が加えられることとなりました。

調査の実施にあたっては、諸先生方にご指導を賜り、また土地所有者・近隣の方々には文化財の重要性をご理解いただき、多大なご協力を賜りました。また、文化庁・大阪府教育委員会ならびに関係機関には、格別のご指導とご配慮をいただきました。このような各方面の方々のお力添えにより、豊中市の文化財保護行政が一層推進できることに対し、皆様方に厚く御礼申し上げます。

近代都市として開発の進む豊中においては、今後うるおいのある町づくりを進める上において、郷土の歴史や文化に寄せる期待は、益々大きくなるものと思われます。現代に生きる私達は、先人の足跡に思いを寄せるとともに、文化遺産として後世に伝えていく責務についてもあらためて考えたいものであります。

平成3年3月31日

豊中市教育委員会

教育長　青木伊織

目 次

第Ⅰ章 位置と環境 1

第Ⅱ章 本町遺跡第13次調査の概要

1 調査の経緯	3
2 調査の概要	3

第Ⅲ章 大石塚古墳第2次調査の概要

1 調査の経緯	7
2 調査の概要	7

図版目次

図版 1 本町遺跡第13次調査地点 (1)調査区全景 (西から)

(2)調査区全景 (北西から)

図版 2 本町遺跡第13次調査地点 (1)調査区上層断面 (南側)

(2)竪穴式住居跡 2 上層断面

(3)竪穴式住居跡 2 炉断面

(4)柱穴細部

(5)柱穴細部

図版 3 本町遺跡第13次調査地点 (1)S P-53 遺物出土状況

(2)S P-53、S P-66 出土遺物

図版 4 大石塚古墳第2次調査地点 (1)調査区東側全景 (北西から)

(2)調査区北側全景 (西から)

図版 5 大石塚古墳第2次調査地点 (1)円筒埴輪棺 墓擴検出状況 (北から)

(2) 同 検出状況 (北から)

- | | | | |
|------|----------------|--|------------------------|
| 図版 6 | 大石塚古墳第 2 次調査地点 | (1)円筒埴輪棺
(2) 同 | 検出状況(東から)
検出状況(北から) |
| 図版 7 | 大石塚古墳第 2 次調査地点 | (1)円筒埴輪棺
(2) 同 | 敷石の状況(北から)
鉄鎌出土状況 |
| 図版 8 | 大石塚古墳第 2 次調査地点 | (1)円筒埴輪
(2) 同 細部
(3)大型壺
(4)鉄鎌 | |

插図目次

第1図	周辺遺跡分布図(1:30000)	2
第2図	調査範囲図(1:250)	3
第3図	調査地点位置図(1:5000)	3
第4図	調査区平面図・断面図(1:60)	4
第5図	S P-53 遺物出土状況(1:12.5)	5
第6図	炉 平面図・断面図(1:20)	5
第7図	出土遺物実測図(1:4)	6
第8図	調査地点位置図(1:5000)	7
第9図	調査区平面図・断面図(1:80)	折り込み
第10図	円筒埴輪棺 平面図・立面図(1:10)	9
第11図	円筒埴輪棺断面図(1:20)	10
第12図	棺内土層断面	10
第13図	棺内敷石の状況(1:12.5)	10
第14図	鐵縄出土状況 平面図・立面図	11
第15図	出土遺物実測図(1:6)	12
第16図	鐵縄(1:2)	13
第17図	調査区位置図(1:500)	14

例　　言

1. 本書は農中市教育委員会が平成2年度国庫補助事業（総額3,000,000円、国庫50%、府費25%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査概要報告書である。
2. 本年度の調査は、本町遺跡、大石塚古墳について実施した。平成2年6月18日～平成3年3月30日までの間、発掘調査ならびに整理作業を行なった。
3. 発掘調査は本市教育委員会社会教育部社会教育課文化係が実施した。詳細は下表のごとくである。
4. 本書の執筆・編集は服部が実施した。
5. 各調査地の土地所有者、施工業者、ならびに近隣の住民の方々には、文化財保護に対して深くご理解いただいたことについて、深く感謝いたします。

遺跡名	調査地	調査面積	担当者	調査期間
本町遺跡13次	豊中市本町3-167	56m ²	服部 聰志	平成2年6月18日～6月27日
大石塚古墳2次	豊中市岡町北1-68	130m ²	服部 聰志	平成2年11月13日～12月26日

第Ⅰ章 位置と環境

位置 大阪府北部に位置する豊中市は、商都大阪を控える地理的条件から、早くから都市化をとげた近郊ベッドタウンの一つである。市域は、西を一部猪名川に界されて兵庫県と境を接し、北は池田、箕面市、東は千里丘陵を二分するかのように吹田市と境を分かつ。

この豊中市は、地形からみれば北部の丘陵地域、南部の沖積平野に大きく区分され、これらを南北に分断するように、千里川、天竺川の各河川が猪名川、神崎川に注ぎ込む。今回調査の対象となった本町遺跡、大石塚古墳は、いずれも北部丘陵、通称豊中台地の西縁付近に位置している。

歴史的環境 豊中市における最初の人類の足跡は、所謂国府型ナイフ形石器に代表される後期旧石器時代に求められる。これまで螢池西、柴原など市内5ヶ所の遺跡からナイフ形石器が単独で出土しており、その多くは千里川流域に集中する傾向が認められる。つづく繩文時代の遺跡としては、空港A地点遺跡、原田西遺跡、穂積遺跡など沖積平野に立地する遺跡の他、近年になって、野畑遺跡、野畑春日町遺跡、内田遺跡など、主として千里川上流の低位段丘に立地する遺跡の存在が明らかになってきた。狩猟採集を経済基盤とする旧石器、繩文時代においては、千里川流域が主たる生業活動の場であったことがうかがえる。

弥生時代になると、それまでの丘陵部から一変して、沖積平野部へと生活の舞台を移す。勝部遺跡、小曾根遺跡は、それぞれ千里川、天竺川の各水系を代表する弥生前期以来の拠点集落である。中期になると、螢池北遺跡（宮の前遺跡）が箕面川水系の拠点集落として出現する一方、千里川水系でも新免遺跡が豊中台地西端の低平な丘陵上に新たに出現する。また中期後半には、新免遺跡が規模を拡大させるとともに、待兼山遺跡、螢池西遺跡、曾根遺跡、上津島南遺跡など全く新たな地域に遺跡の分布が広がる。遺跡の動向にさらに大きな変化がみられるようになるのは、後期においてである。すなわち、勝部、小曾根、螢池北（宮の前）の各拠点集落が解体し、それに替って穂積遺跡が出現し、新免遺跡は継続、発展する。またそれとともに柴原、山ノ上、豊島北、服部、上津島、島田、庄内遺跡などが出現し、さらに遺跡の数的、面的な拡大が進行する。

古墳時代の遺跡は、その多くが弥生時代以来の集落を継続するものであり、とくにその中でも新免、山ノ上、穂積、北条、上津島、島田の各集落は顕著な内容を有する。一方古墳では、前期に遡るものとして待兼山古墳、御神山古墳があり、前期末から中期にかけて桜塚古墳群が営まれる。北部丘陵に展開する桜井谷古窯跡群は、中期末から奈良時代にかけて操業された須恵器窯で、それと密接な関連を有する横穴式石室墳が千里川流域に点在している。



- | | | | | | |
|------------|-------------|------------|------------|-------------|--------------|
| 1. 宝池北造跡 | 10. 郡神山古墳 | 20. 櫻塚古墳群 | 30. 騎部造跡 | 40. 渡山造跡 | 50. 上津島造跡 |
| (須田市宮ノ前遺跡) | 11. 南刀出山造跡 | 21. 岡町北造跡 | 31. 野部東造跡 | 41. 恵那造跡 | 51. 上津島南造跡 |
| 2. 侍堀山造跡 | 12. 雾輪造跡 | 22. 小石塚古墳 | 32. 原田城跡 | 42. 芦竹町造跡 | 52. 須那西造跡 |
| 3. 内田造跡 | 13. 旗野町造跡 | 23. 大石塚古墳 | 33. 原田造跡 | 43. 寺内造跡 | 53. 穂積ボンブ場造跡 |
| 4. 荘原造跡 | 14. 金寺山廻寺 | 24. 大塚古墳 | 34. 曽根西造跡 | 44. 楼堂の前造跡 | 54. 横根造跡 |
| 5. 飯池東造跡 | 15. 斎免宮山古墳群 | 25. 鮎郷子塚古墳 | 35. 原田西造跡 | 45. 和倉西造跡 | 55. 小曾根造跡 |
| 6. 桜井谷京跡群 | 16. 本町造跡 | 26. 南天平原古墳 | 36. 原田中町造跡 | 46. 和倉北造跡 | 56. 今岡氏屋敷 |
| 7. 上野造跡 | 17. 斎免造跡 | 27. 長興寺造跡 | 37. 原田元町造跡 | 47. 和倉造跡 | 57. 北条造跡 |
| 8. 雷池西造跡 | 18. 山ノ上造跡 | 28. 梅塚古墳 | 38. 曽根南造跡 | 48. 和倉南造跡 | 58. 鳥田造跡 |
| 9. 麻田落脚原跡 | 19. 下原窓跡群 | 29. 走井造跡 | 39. 登島北造跡 | 49. 上津島川床造跡 | |

第1図 周辺遺跡分布図(1 : 30000)

第Ⅱ章 本町遺跡第13次調査の概要

1. 調査の経緯

調査地点は、本町3丁目167に所在する。本町遺跡の範囲としては北縁部、すなわち千里川を見下ろす段丘の端部付近に位置する。今回、土地所有者より住居建て替えの中請が提出され、それにもとづき試掘調査を実施したところ、現地表下40cmにおいて遺構面の存在が確認された。よって建物範囲の全面を調査の対象とし、6月18日より約10日間の日程をもって調査を実施した。



第2図 調査範囲図(1:250)

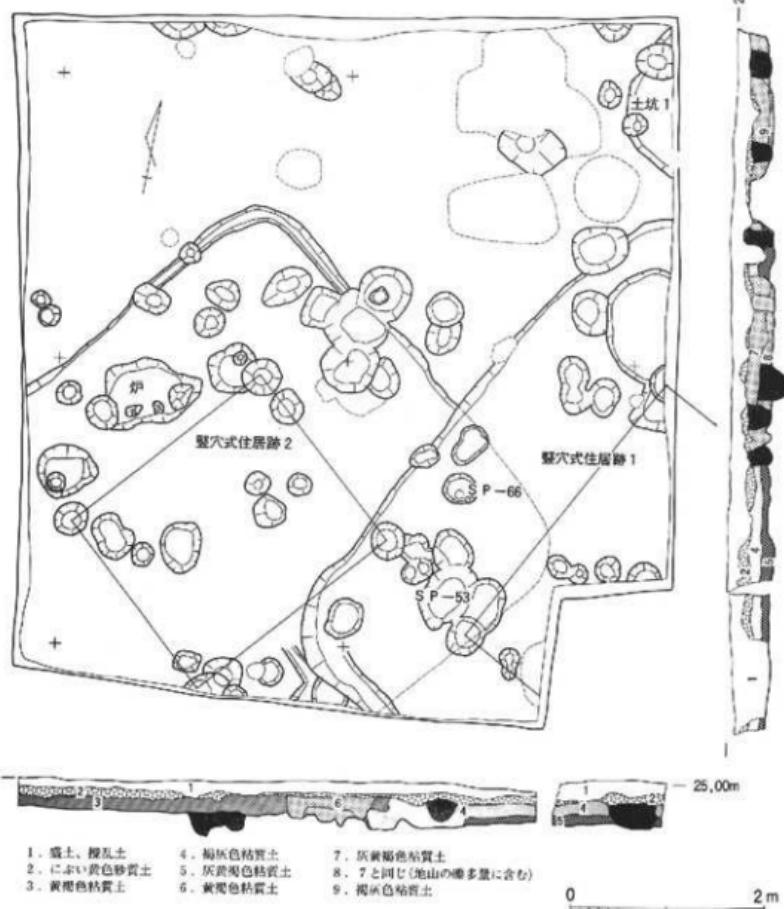
2. 調査の概要

(1) 基本層序

現地表より約15cmの深さは、新しい整地層である。その下に10cm前後の旧耕土層が残存する。



第3図 調査地点位置図(1:5000)



第4図 調査区平面図・断面図(1:60)

この耕土層の下が、すなわち赤褐色粘土を主体とする地山層であり、遺物包含層は後世の削平により全く遺存していなかった。遺構はいずれも、この地山層上面において検出したものである。

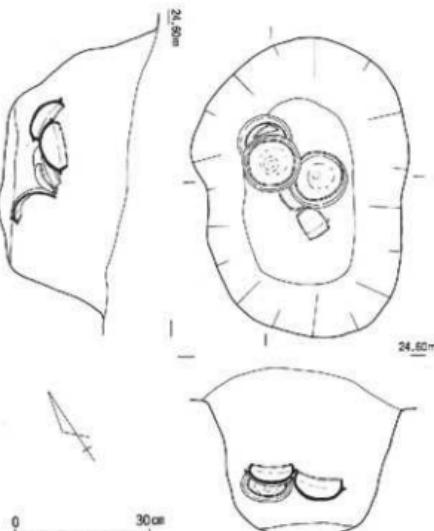
(2) 検出遺構

今回の調査で検出した遺構として、竪穴式住居跡2、土坑3、柱穴を含むピット65があげられる。以下、主要な遺構について概要を述べる。

竪穴式住居跡1 調査区東側で検出した方形プランを有する竪穴式住居跡で、西側部分の3分の1程度を検出した。正確な数値は測り得ないが、一辺の長さおよそ6.1m前後と推定される。検出した深さは約16cm。周溝の存在はそれほど明確ではなく、南端部においてそれとみられる幅約30cmの溝状の落ちが検出されたにすぎない。この住居跡に伴うとみられる柱穴が、2ヶ所で検出されている。いずれも直径40cm、深さ30cm前後を測る。柱穴間の距離は約3.3mで、おそらく4本柱からなるものと推定される。なお、当住居跡の方針はN-34°-Eである。

ところで、南側の柱穴に接してS P-53を検出した。長径66.5cm、短径48cm、深さ33.5cmで、楕円形状を呈する。灰黄色粘質土を主体とする埋土中より、6世紀初頭の特徴を有する須恵器の杯がまとまって出土した。完形品3、破片3からなり、全て上向きに意図的に重ねたように置かれていた。

竪穴式住居跡2 竪穴式住居跡1と重複するように検出された、同じく方形プランを有する住居跡である。土層観察の結果、当住居跡が新しく営まれたものと推定される。東北部の一辺約5.08m、西北部は正確には分からぬが、柱穴の位置関係からおよそ5.3mを測るものと推定される。検出した深さは約20cm。北側コーナーにおいて幅18cm前後、深さ2~3cmの浅い周溝があがる。柱穴は4本検出された。いずれも直径34~45cm、深さ35~45cmを測る。柱穴間の距離は東北部で約2.2m、西北部で約2.5m。なお住居北西部の床面において



第5図 SP-53 遺物出土状況(1:12.5)



第6図 炉 平面図・断面図(1:20)

不定形の浅い落ちを検出した。長径1.1m、短径0.7m、深さ約18cmで、焼土、炭、灰屑の堆積が認められた。住居内の位置関係から、おそらく炉跡と推定される。なお、当住居跡の方位はN-52°-Eである。

土坑1 調査区の北東部で検出した土坑である。大半が調査区外にのびるため、全体の規模、形状等は不明。ただし検出した範囲での平面、断面形態から、方形プランを有する竪穴式住居跡の可能性も考えられる。

(3) 出土遺物

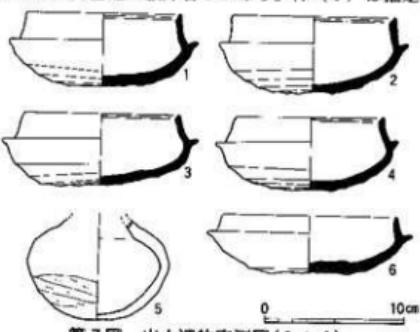
今回の調査で出土した遺物は、コンテナにして約1箱分である。大半が細かい破片であり、このうち図示できたものは住居内のピット出土のものに限られる。以下、SP-53、SP-66から出土した須恵器について概要を述べる。

SP-53（第7図1～4） 完形、ほぼ完形を含めて4個体があり、器種は全て須恵器の杯に限られる。口径10.4cm～11.4cm、器高5.1～5.3cmを測る。形態には若干の個体差があるが概ね丸みをもった体部から、急な傾斜で高い口縁部が立ち上がる。口縁端部には、鈍い凹線が巡る。体部の三分の二程度を回転ヘラケズリにより成形し、他を回転ナデ調整による。桜井谷古窯跡群の編年より、2型式1段階に相当する。

SP-66（第7図5、6） 須恵器杯、および上師器の破片各1がある。杯（6）は推定口径14.4cm、器高4.0cm。低平な体部より短く内傾する口縁部を有し、口縁端部は丸くおさめる。桜井谷古窯跡群の編年で2型式4段階に相当する。越とみられるもの（5）は、体部径10.0cm、残存高7.0cmで、外面下部を手持ちヘラケズリ、内面は回転ナデ調整を施す。須恵器の生焼けかともみられたが、外面の調整が極めて難であり、土師器と判断した。

(4) まとめ

古墳時代後期に属する竪穴式住居跡2棟をはじめ、土坑、ピット多数を検出した。住居跡は重複関係にあるが、いずれも良好な遺物に乏しい。ただSP-53が竪穴式住居跡1に、SP-66が遺物出土レベルから竪穴式住居跡2に伴うものであるとすれば、各々6世紀初頭、6世紀後半の年代を与えることも可能である。いずれにせよ、今回の調査地点のように、千里川を見下ろす段丘端部において住居跡が確認されたことは、今後本町遺跡における遺構の広がりを考える上で貴重な成果といえる。



第7図 出土遺物実測図(1:4)

第Ⅲ章 大石塚古墳第2次調査の概要

1. 調査の経緯

調査地点は、岡町北1丁目68に所在する。国史蹟大石塚古墳の隣接地にあたり、古墳との位置関係からすれば前方部西南隅付近に相当する。このたび土地所有者より住居建て替えの申請が提出され、事前調査を実施するはこびとなつた。

調査は当初、前方部の範囲確認を上目的として、敷地北側に幅1m、長さ18mのトレンチを設定した。その後、敷地東側部分を中心として新たに調査区を広げたが、前方部に相当する墳丘の高まりは確認されなかつた。一方、調査区北側において、東西に走る段状の落ちを検出し、さらに西方にのびることが予想されたので、東側部分の調査終了後、敷地北西部を拡張することとした。以上の結果、段状遺構および円筒埴輪1を検出するところとなつたのである。

2. 調査の概要

(1) 基本層序

調査地点は現在、建物敷地として平坦に整地されている。しかし、本来の地形は西側に落ちた



第8図 調査地点位置図(1:5000)

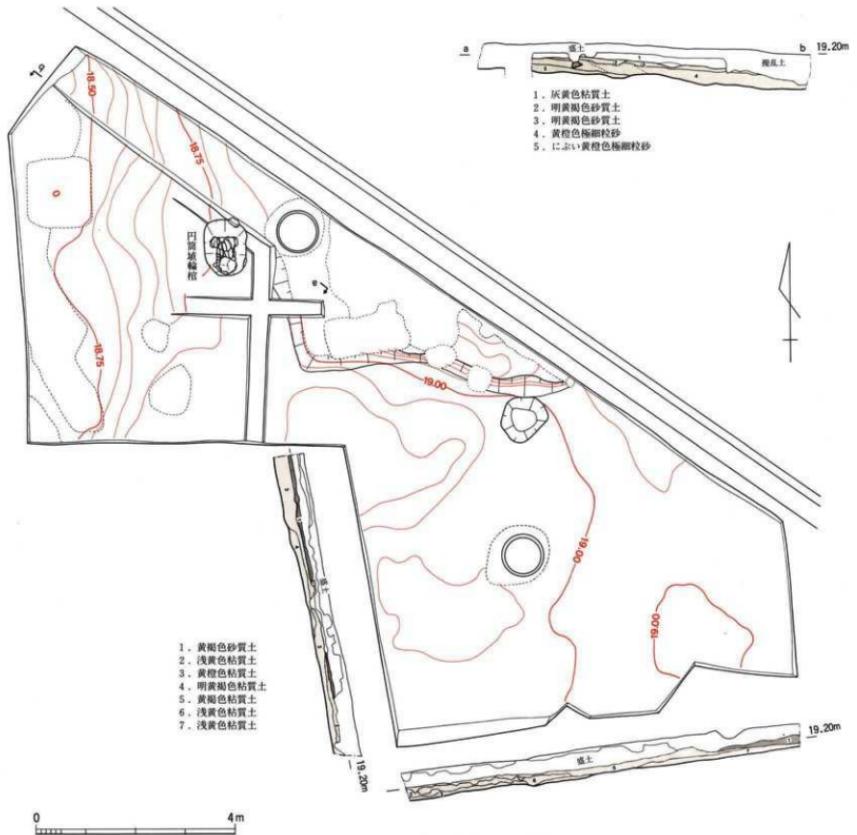
込む緩慢な傾斜面をなしており、その結果、敷地西側ほど厚い盛土がなされている。この盛土層は厚さ25~50cmを測り、その下に旧地表を覆う黄褐色砂質土が約5cmの厚さで堆積していた。段状遺構、円筒埴輪棺は、いずれもこの層の下から検出したものである。ただし円筒埴輪棺は本来の地山（黄橙色粘土）の上に堆積した黄褐色粘土の上面から掘り込まれたものであり、この土層に、わずかではあるが埴輪片を含む点から、大石塚古墳築造後に堆積した流出土と考えられる。なお後述するように、円筒埴輪棺の遺存状況から判断する限り、調査地点全域にわたりある程度の流出もしくは削平を受けているものと推定される。

(2) 検出遺構

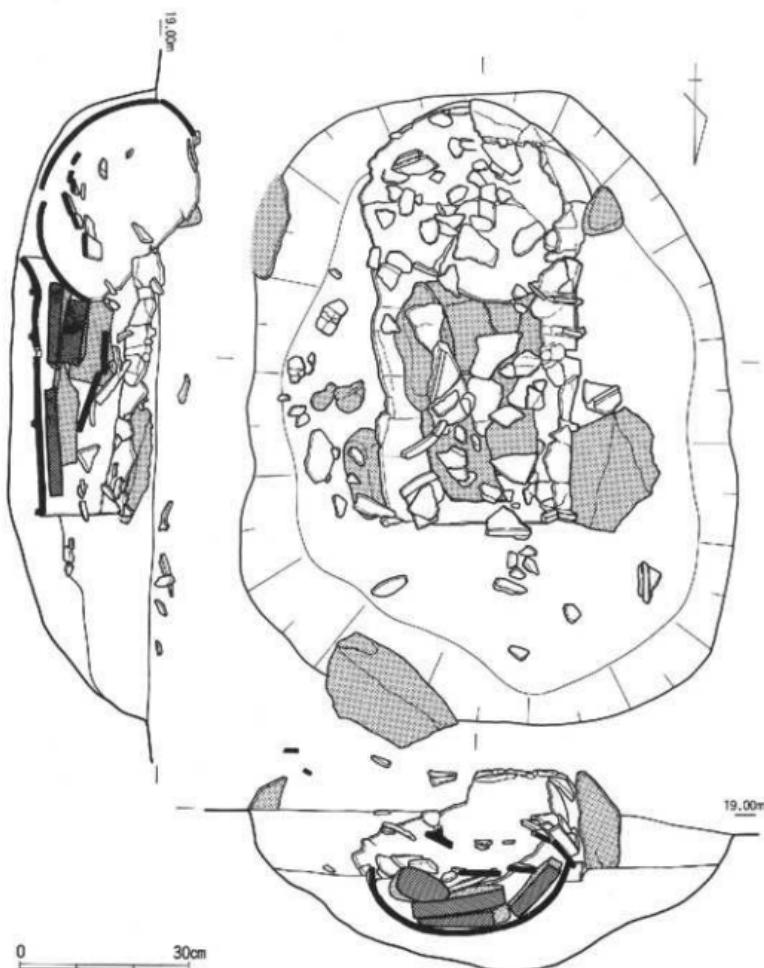
上述したように、今回の調査地点においては、大石塚古墳前方部に相当する墳丘の立ち上がりを検出することはできなかった。おそらく本末の墳丘は、さらに東側に位置するものと思われる。ただし調査地点北側において、意外にも段状の遺構および円筒埴輪棺1を検出することとなった。以下、各々の遺構について概要を述べる。

段状遺構 調査地点中央部の北側において、ほぼ東西方向に走る段状の遺構を検出した。長さ5.6m以上にわたり地山を掘り込んだもので、深さ約25cmを測る。この段は西端部においてほぼ直角に北側に向かって屈曲するが、もとの地山傾斜面と一致する可能性が高く、本末の形状を示すものであるかどうかは明確でない。この段より南側は、ほぼ平坦面をなしており、段を埋めるかのように黄橙色、明黄褐色粘土が堆積していた。この埋土中より10数点の埴輪片の他、中央部井戸付近において、奈良時代以降に属する把手付きの甕とみられる破片がまとまって出土した。埴輪はいずれも磨耗がはげしく、大石塚古墳から流れ込んだものとみられる。一方の土師器甕は、ほぼ地山直上から出土したもので、土層観察の結果から、後世の掘り込みに伴う可能性は低いものと判断された。この点からすれば、当遺構は比較的新しい時期に営まれたものとも考えられる。ただ段状遺構の肩部において、脆く細片化した埴輪片が地山に密着して出土しており、古墳時代に遡る可能性も全くは否定できない。ここで一つ注目すべき点として、大石塚古墳第1次調査において、前方部に設けた東西トレント（第8トレント）西側に、低い段状の落ちが検出されたことがあげられる。この落ちについては、もともと前方部西方にある低い高まりに伴うものと考えられてきたが、今回検出した段状遺構も、この落ちにつづく可能性が考えられる。ただこのマウンド状の高まりについては、第1次調査の時点でも主体部等の存在は認められず、性格等についてはなお判然としないものである。

円筒埴輪棺 調査区の西側拡張部において検出した。墓擴は、長径1.12m、短径0.87mで円筒埴輪棺としてはかなり小規模な部類に属する。検出した深さ28cm。平面形はややいびつな橢円形を呈し、底部は丸く掘り込まれている。この墓擴の南側に寄せて、円筒埴輪棺が設置されていた。棺は円筒埴輪1、大型甕1を合わせ口にしたものであるが、円筒埴輪は2段目以下を

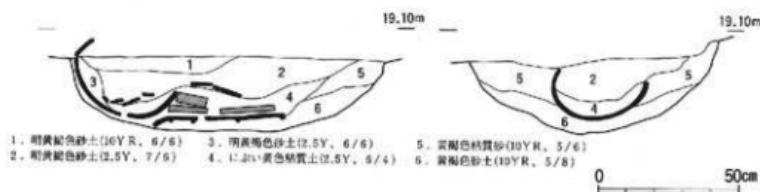


第9図 調査区平面図・断面図 (1:80)



第10図 円筒埴輪棺 平面図・立面図(1:10)

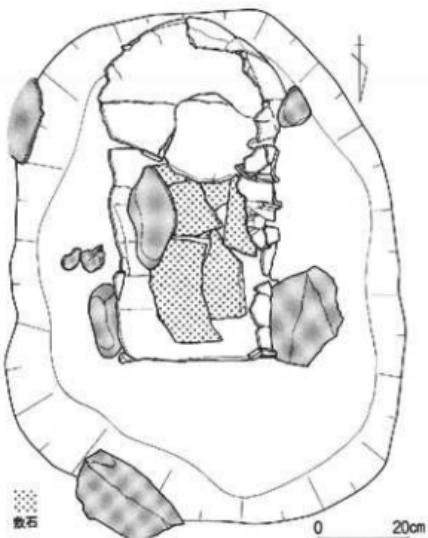
欠失、大型壺も頸部から口縁部を欠失するものであった。円筒埴輪、大型壺を含めた長さ75.5cm、幅は北端部で34cm、南端部の最大幅40cmを測る。この埴輪棺は、丸く掘られた墓壙の底にまず黄褐色粘質砂（第11図6）を敷き、その上に安置したのち、さらに棺の周囲を明黄褐色粘質土（第11図4、5）で埋め戻したものと考えられる。そしてこの明黄褐色粘質土で埋め戻す



第11図 円筒埴輪棺断面図



第12図 棺内土層断面



第13図 棺内敷石の状況(1:12.5)

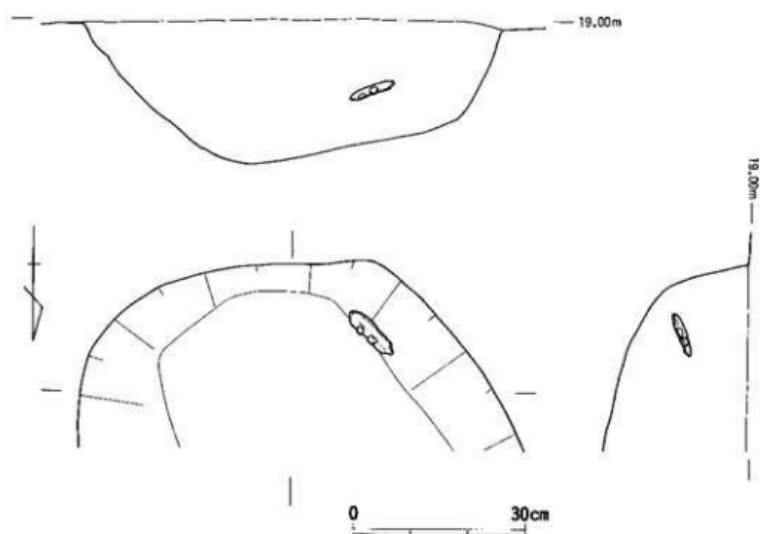
際に、棺の安定を図るため置かれたとみられる塊石が、計4個検出された。このうち棺東側に置かれたうちの1個が、棺内より落ち込んだ状態で出土した。

棺の内部には、土圧により崩壊したとみられる破片が多数落ち込んでいた。ただし復元の結果、円筒埴輪の3分の1程はすでになく、調査

以前に流出もしくは削平を受けたものと考えられる。円筒埴輪の直径とも考え合わせると、本來の墓壙は、現状よりさらに20cm以上深いものであったと考えられる。

前述のように、この埴輪棺は大型壺と円筒埴輪を合わせ口にしたものである。その際、口頭部を欠失した壺の上部を、円筒埴輪の口縁部内に挿入していた。一方の円筒埴輪は、四方に開けられた透かし穴のうち1個を、故意に中央にくるよう置かれていた。

この円筒埴輪棺で最も特徴的なこととして、敷石の存在があげられる(第13図)。これは円筒埴輪の内部に計5枚の板石を敷いたもので、このうち南側中央の2枚は重ねて置かれていた。また、2枚はいずれも大型壺の下から検出され、これに



第14図 鉄鎌出土状況 平面図・立面図

より棺は、円筒埴輪一敷石一大型壺の順に設置されたものと判断される。これらの板石は、神戸層群より産出される溶結凝灰岩に属し、特徴ある淡い緑色を呈する。大石塚古墳第1次調査後円部トレンチ（第3トレンチ）から出土した葺石の石材と全く同種のものであり、おそらく、当埴輪棺を背むに際し、大石塚古墳の葺石を転用したものであろう。

ところで、この円筒埴輪棺南端部において、鉄鎌が1本出土した。掘形上面より約10cmの深さのところで、掘形斜面と大型壺に挟まれた状態で出土したのである。やや不自然ともいえる位置にあるが、棺外に置かれた副葬品とすべきものであろう。

なお、当円筒埴輪棺の埋葬頭位は、円筒埴輪の方向および大型壺の位置から南北向と推定されその方位は、ほぼ正確に南北方向を示す。

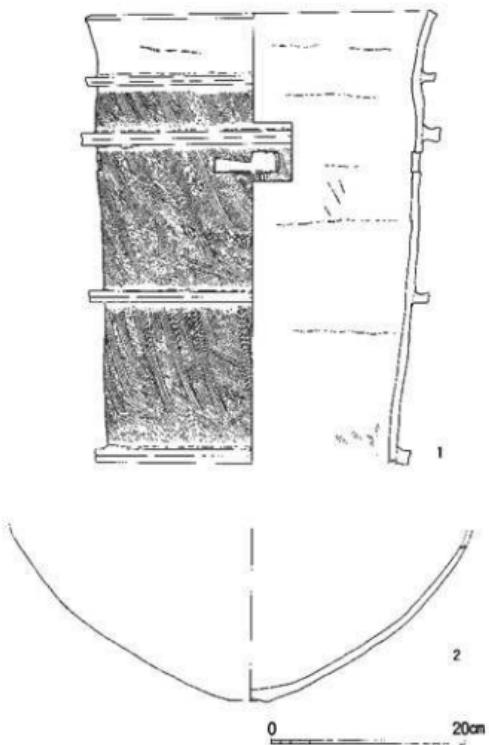
(3) 出土遺物

円筒埴輪棺に使用された円筒埴輪、大型壺、そして棺外に副葬された鉄鎌がある。以下、各々について概要を述べる。

円筒埴輪（第15図1） 口縁部径34.6cm、遺存する高さ46.3cmを測る。大石塚古墳墳丘ならばに小石塚古墳外周円筒埴輪棺出土資料の中に類似例が求められ、それによると本来6段5突帯からなる円筒埴輪と考えられる。下2段については、突帯直下の接合痕部分できれいに打ち削られており、おそらく大石塚古墳墳丘に樹立されていた埴輪のうち上4段分のみを転用したもの

であろう。現存する4段のうち上2段は幅が狭く、現存する3段目はやや内傾、最上段（口縁部）はわずかに外反する。器体の厚さは約8mmで、口縁端部は内外に若干肥厚し、端面は強いヨコナデによりわずかに凹む。

器面の調整は、概ね外面を細かいナナメハケ（8本/cm）、内面は斜め方向のユビナデを基本とする。外面のハケメ調整は、その重なり具合から大きく2段階に分けて施され、初回は傾斜の緩いハケメを器面全体に密に施し、2回目はそれよりも強い斜向で粗い間隔で施している。またそのハケメ単位の幅は、初回に比べ1cm前後と狭い。このように単位幅が狭く、粗いハケメは、大石塚、小石塚のこれまでの出土例にはみられず、極めて特徴的なものである。一方、内面は、現存最下段にハケメが部分的に残る他は、全体的に斜め方向のユビナデを基調とする。なお最上段（口縁部）は、内外面ともにヨコナデが施され、外向の一部にヘラ記号状の刻線がある。



第15図 出土遺物実測図(1:6)

透穴は、現存2段目、すなわち本来の4段目に鉤形の透穴が四方に穿たれ、おそらくは2段目にもあったと思われる。透穴は、段の上方に偏って穿たれており、鉤状の割りは右上方に行なわれる。これまでに大石塚、小石塚古墳から出土した、6段5突帯を基本とするこの型式の円筒埴輪では、三角形、鉤形のいずれにかかわらず、透穴は5段目にも開けられるのが一般的であったが、本例には認められない。また鉤形の割りの位置が、大石塚古墳出土埴輪7（註1）文献 第36図2）では各段とも右下に、埴輪1（註1）文献 第37図6）では2段目が左上、3段目は右下にくるように穿たれ、個体によってかなりのバリエーションが認められる。

突帯は、下3段は幅1~1.4cm、

高さ1.3~1.8cmで、幅が狭く突出度の高いシャープなつくりである。断面は部分によって異なるが、基本的にはM字形を呈する。最上段の次帶は、前者に比べると幅が狭く、さらにシャープな感じを受ける。

なお器面の一部には、黒斑状の変色部が縦方向に存在する。本資料においては、赤色顔料の塗布は認められなかった。

大型壺（第15図2） 大型品のわりに器体は薄くつくられているため、残りが非常に悪く、現在復元作業中である。したがって、出土状況とこれまでの観察結果にもとづいて述べることとする。

正確な大きさは不明であるが、体部の高さ約40cm、最大径40cm前後を測るものと推定される。球形に近い丸い体部に、やや尖り気味の底部がつく。底部は径4cm、厚さ1.3cmで中央部がややくぼんでおり、全体の大きさに比すると極端に小さい。風化が激しく、器面の調整は明瞭でないが、内外面ともに丁寧なナダ調整によるものとみられる。胎土には径1~3mm大の長石、石英を多く含み、焼成はあまく、全体に赤褐色の色調を呈する。埴輪の胎土とも共通する点が多い。口縁部および頭部については、円筒棺に使用するに際し、故意に打ち割ったものと考えられる。おそらくもとは二重口縁の形態を有するものであった可能性が高い。

本資料は、小さいながらも底部を有する点から、壺形の土器として認識した。しかし胎土、色調、焼成など多くの点において、埴輪との間に共通性を有することも事実である。この点については、明らかに埴輪として認識される小石塚古墳の壺形埴輪が、底部に焼成前の穿孔をともなっており、底部を有する本資料とは区別されるべきものと判断した。

鉄鎌（第16図） やや大型の柳葉式鎌である。残存する長さ10.6cm、鎌身部の長さ9.3cm、同厚さ4mm、最大幅2.6cmを測る。鎌身部の断面はレンズ状を呈し、両丸造りとみられる。刃部は直線的であるが、下半部は若干内刃気味につくられる。鎌先はやや丸い。鎌身部と茎部の間には明瞭な闊を有する。茎部は折損しているが、これは調査の際に失したものであり、もとは完形品であったと思われる。茎部の断面は台形状を呈し、長さ5cm程の次第に根元が細くなるタイプのものであったと推定される。

（4）まとめ

今回の調査は、大石塚古墳前方部の範囲確認を目的として実施したものである。しかしながら当調査区において、前方部に相当する墳丘の立ち上がりは検出されず、それに代って円筒埴輪棺1、段状造構1をそれぞれ検出するところとなった。

円筒埴輪棺は、これまで小石塚古墳の周辺から計3基が集中して検出されているが、今回の調査の結果、大石塚古墳周辺部にも同様に円筒埴輪棺が置かれていることが判明した。検出し



第16図 鉄鎌



第17図 調査区位置図(1:500)

た円筒埴輪棺は、長さ75.5cm、幕墳の長さでも1.12mを測るにすぎず、これまでに両古墳から検出された円筒埴輪棺のなかでは最も小規模なものである。当然ながら通常の成人埋葬は考えられず、乳幼児もしくは成人の改葬性を想定することも可能である。この円筒埴輪棺の時期を推定する上で重要な点は、幕墳掘込面が本米の地山面よりも高く、大石塚古墳築造後に流出したと考えられる上層の上から掘削されている点である。このことは、使用された埴輪が主墳に樹立したものと転用であるらしいことと合わせ、大石塚古墳よりは明らかに後出のものであることを示す。

段状遺構については、その所属する時期が明確でなく、大石塚古墳との関係について積極的に論じることはできない。ただ、これが主墳と同時期のものとした場合、墳丘外にマウンドをもつ、いくつかの古墳の例が思い起される。奈良県室宮山古墳、大阪府津守城山古墳、兵庫県五色塚古墳などが挙げられ、いずれも墳丘形態、埴輪、副葬品等から、大石塚古墳と概ね並行する時期のものであることが知られている。しかし今回はあくまでも部分的な調査にすぎず、この点については今後の調査の進展に待つこととした。

註 (1)『史跡大石塚・小石塚古墳』豊中市教育委員会 1980

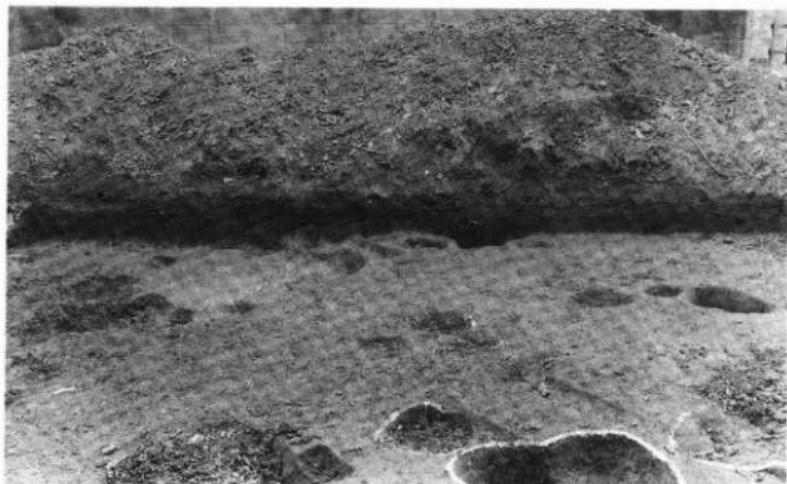
図 版



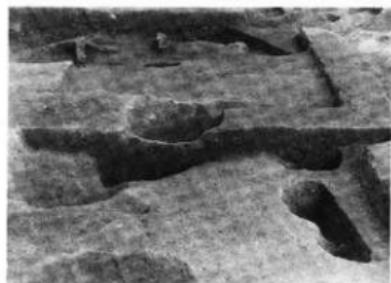
(1)調査区全景（西から）



(2)調査区全景（北西から）



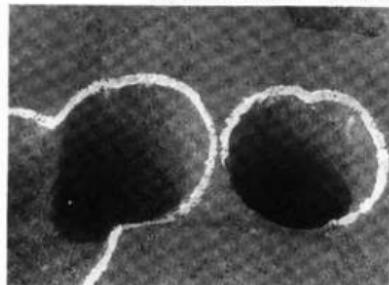
(1) 調査区土層断面（南側）



(2) 窪穴式住居跡 2 上層断面



(3) 窪穴式住居跡 2 炉断面



(4) 柱穴細部

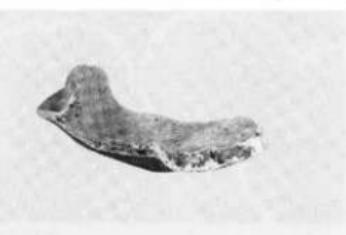
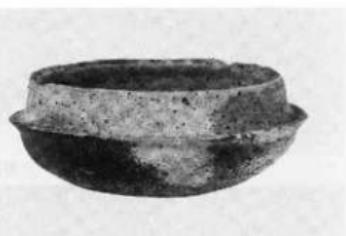
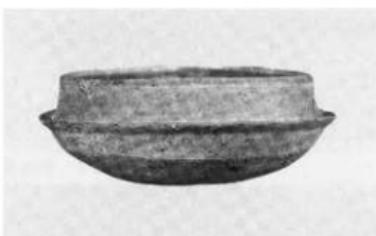
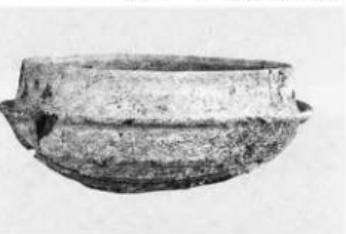


(5) 柱穴額部

図版3 本町遺跡第13次調査地點



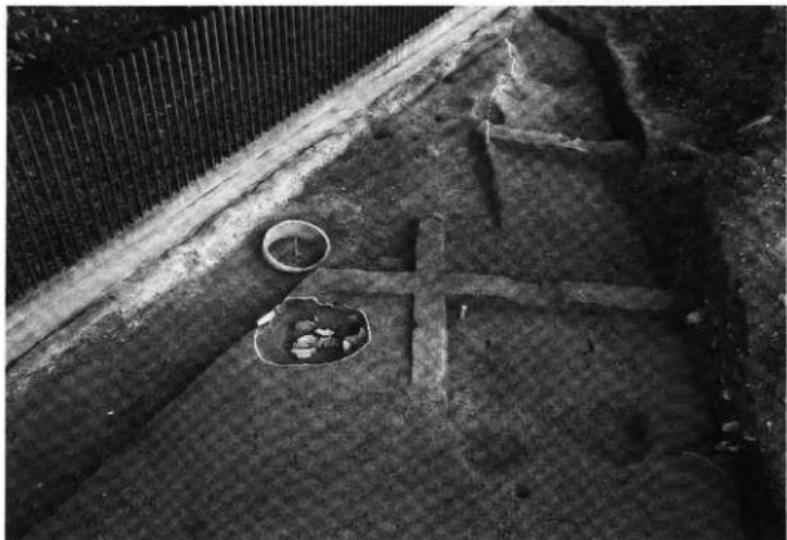
(1) S P - 53 遺物出土状況



(2) S P - 53、S P - 66 出土遺物



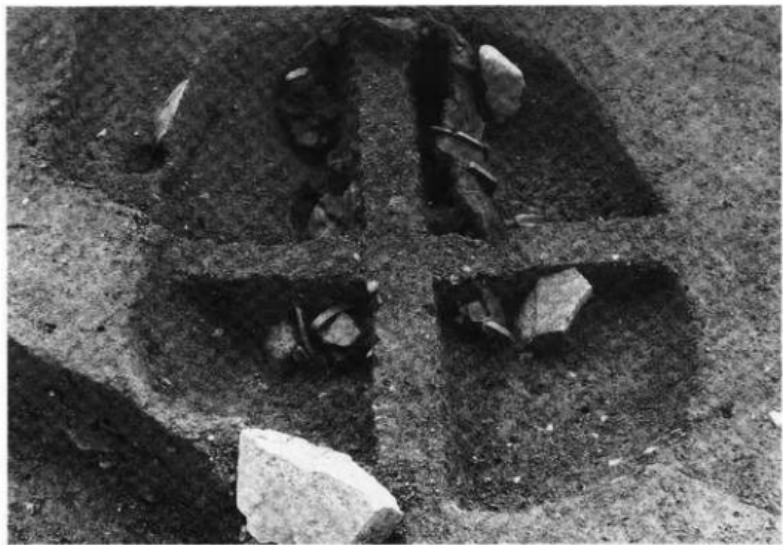
(1)調査区東側全景（北西から）



(2)調査区北側全景（西から）



(1)円筒埴輪棺 墓壙検出状況（北から）



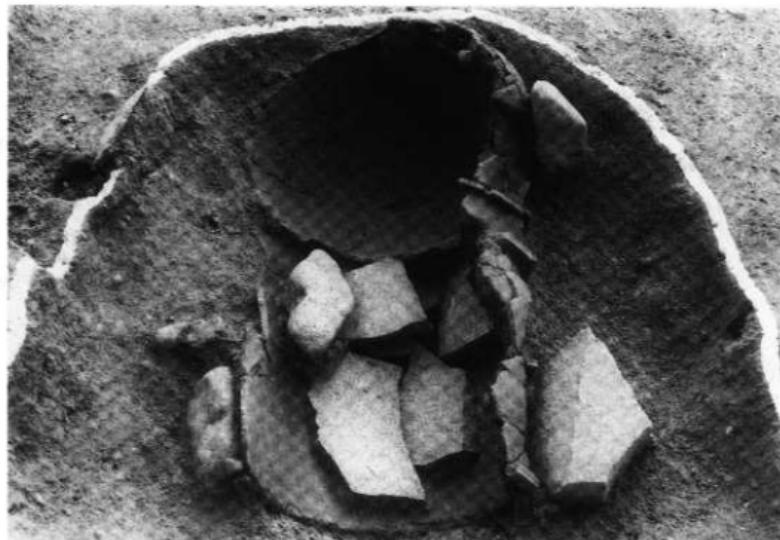
(2) 同 検出状況（北から）



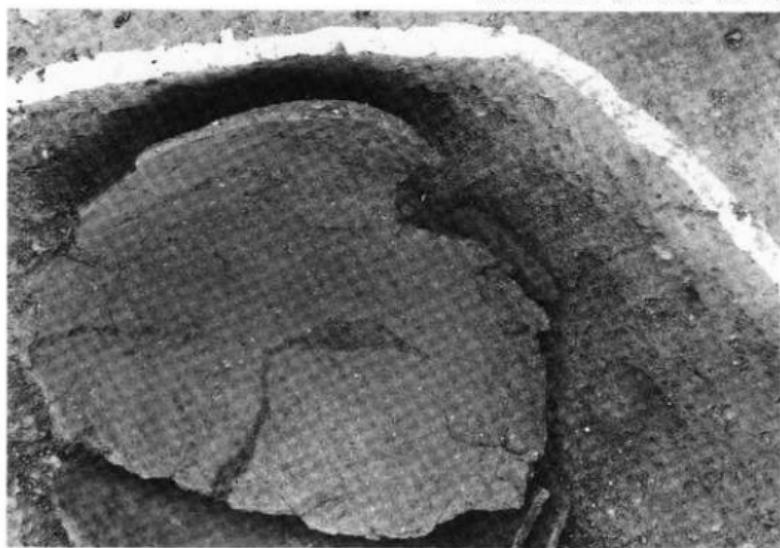
(1)円筒埴輪棺 検出状況（東から）



(2) 同 検出状況（北から）



(1)円筒埴輪棺 敷石の状況 (北から)



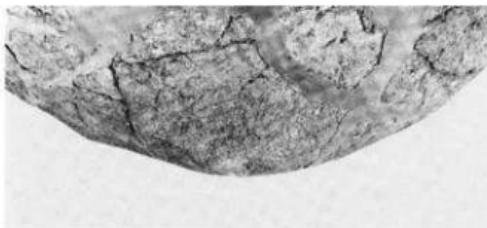
(2) 同 鉄鎌出土状況



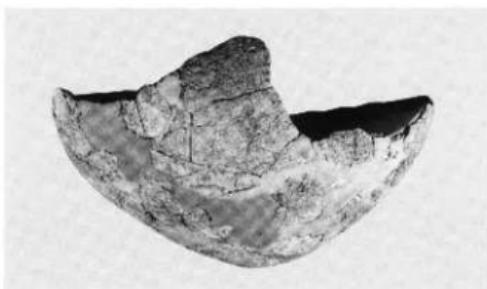
(1)円筒埴輪



(2) 同 細部



(3)大型壺



(4)鉄鎌

豊中市文化財調査報告第29集

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

1991年3月

発行 豊中市教育委員会
豊中市中桜塚3丁目1-1

編集 社会教育課文化係
印刷 菊田印刷株式会社